15歳の美術

12年の学びをとおして

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

12年の図画工作・美術をとおして

多くの子どもたちは小学校、中学校、さらに高等学校で、図画工作や美術を学び、つくりだす喜びを知り、心と感性を豊かに成長していきます。子どもたちは、どのようなことを考え、成長しているのでしょうか。作品をつくった子どもたちの声、作品からそれぞれの思いが聞こえてきます。

Middle school students

Primary school children

小学生

「銀河鉄道の夜」より

絵の具　ペン　トレーシングペーパー　54×38cm

作者の言葉

向こうからやってくる感じを表しました。天の川をつけたこと、車体の色、サソリの火の燃え方を工夫しました。

指導者の言葉　生徒作品「闘志に燃えた自分」

自画像の指導で心がけていることは、鏡に映った自分の姿を見つめ、自分とは何者か常に考えながら描いてほしいという授業者の願いを伝え続けることです。どのような状況においても、生徒一人ひとりの生活はそこにあり、今この瞬間を真剣に生きることが、自分の未来につながるという思いを大切にしてほしいと考えています。

導入時には、自分についてさまざまな角度から考え、内面を掘り下げる作業をします。その中で表現したい自分の姿と、それにふさわしい表現方法を探っていきます。デッサンの指導はしっかりと行いますが、必ずしも写実性にこだわらず、表面的なものを突き抜けた内面の表現に向かうように助言します。また、さまざまな作品を鑑賞しながら、表現の幅を一律に狭めないよう配慮します。

生徒は、表現の方法やふさわしい描写の仕方に迷いながら、鏡と格闘し続けます。同じ傾向の表現を確認したり、目の前で描いてみせたり、その内容ならそのやり方でよいと励ましたりしながら、生徒に合った方法で助言します。絵を描くことが得意な生徒には、技能に偏って空疎にならないように、似ているだけでよいのかと揺さぶりをかけるような言葉を投げかけます。

最近では授業時間も少なく、技術的なハードルが高いために自画像の制作は作品づくりを嫌いにするのではないかと言われることがあります。確かに、生徒の制作後の感想は、「難しかった」というものが多いです。しかし、自分の姿と向き合い、これまでの自分の軌跡とこれから出会う世界とに思いを馳せ、作品にすることは、とても大切な時間のように思われます。

思いどおりに描けなくとも、有意義な時間だったと思えるような授業づくりをこれからも心がけていきたいと思います。

宮城県名取市立閖上（ゆりあげ）中学校教諭
一條浩明

中学生

闘志に燃えた自分

鉛筆　水彩　紙　54.6×39.3cm

作者の言葉

私たちは中学校入学直前に大震災に遭いました。大変な生活からようやくここまでたどり着いた、そんな3年間でした。これからも困難を乗り越え自分の進路、そして人生を歩んでいく……。じっくり自分と向き合いながらそんな強い気持ちがわいてきました。それを表す色は何かと考え、オレンジと緑の強いコントラストがよいと思いました。

High schooler

高校生

教室の片隅

鉛筆　紙　65×50cm

作者の言葉

美術室の片隅を見つめてスケッチしました。何気なく見過ごしてきたものも、よく見て描いているうちに愛着がわいてきました。

スペシャル対談

中学校美術を軸に、小学校から高校までの12年間という俯瞰的な視点から、美術を学ぶ意義や、美術科が内包する課題などについて、現行の学習指導要領の作成に携わった奥村高明先生と村上尚徳先生、さらに中学校教諭の小泉薫先生、長尾菊絵先生を交えて語っていただきました。

長尾菊絵
（西東京市立ひばりが丘中学校主任教諭）

奥村高明
（聖徳大学教授、前教科調査官・図画工作）

4観点の「見える化」

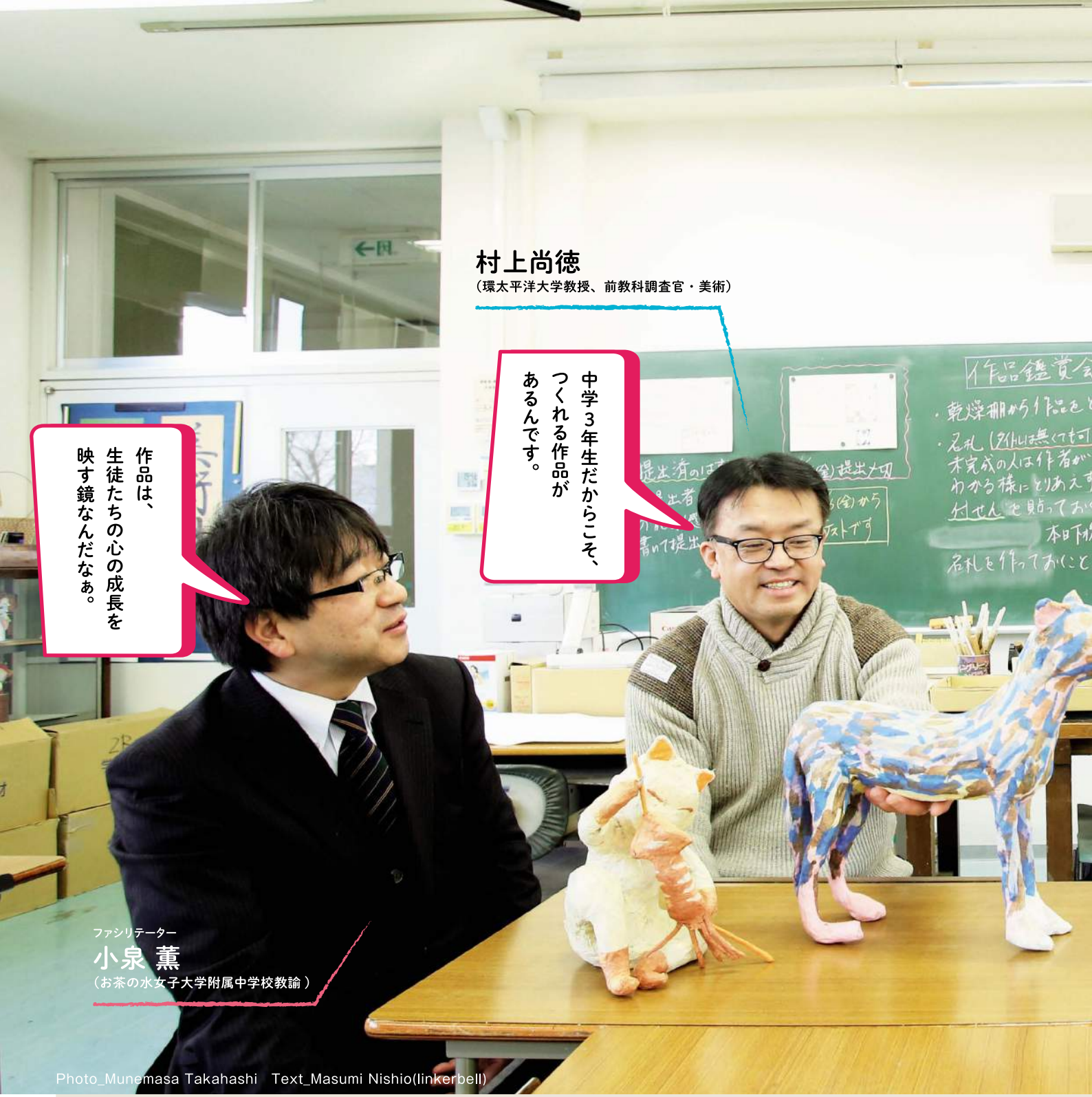
小泉―まずは現行の学習指導要領をつくられた立場から、定着の度合いや実現状況、現場からのリアクションなどをお聞かせ願えますか？

奥村―よく「小中のつながりが良くなった」と言われるんですが、それは当然のことだと思うんですよね。

村上―そうですね。小中の学習指導要領を無理にすり合わせたのではなく、『美術への関心・意欲・態度』『発想や構想の能力』『創造的な技能』『鑑賞の能力』という評価の4観点を軸に学習指導要領を整理したら、自然とつながったというところでしょうか。高校芸術の美術・工芸の指導事項もこの4観点で整理されているので、小・中・高の12年間の美術教育が育成する資質・能力でつながったことになります。

小泉―確かに現行の学習指導要領では、一つの題材について何を学んでほしいのか、すっきり見えるようになり、取り組みやすくなりましたね。

奥村―そもそも図画工作と（中学）美術はつながっているんですよ。たとえば、小学校でも中学校でも絵を描きますよね。しかし同じ題材でも、小学生が描く絵と中学生が描く絵はまったく違う。



村上尚徳
（環太平洋大学教授、前教科調査官・美術）

ファシリテーター
小泉 薫
（お茶の水女子大学附属中学校教諭）

Photo_Munemasa Takahashi　Text_Masumi Nishio(linkerbell)

長尾―中学の美術の授業では、小学校での経験を基に、自分の思いをのせてつくりこんでいく姿が見られます。

奥村―そう、そのつくり〝こむ〟ということそが中学生ならではの学びなんですよ。小学生では、つくったり描いたりすること自体に意味がある。中学生はさらにそこから自分自身を表現しようとする。中学生にもなると、ただ『つくる』だけでは終わらないんですよ。

長尾―生徒たちからもっと工夫をしたいという声が上がると、つい時間をとってあげたくなって……。

村上―授業時間の不足は美術科の教師にとって永遠のテーマでしょうね。*1でも、時間をかければかけただけ良いものができるかと言えば、そうとも言えないでしょう。決められた時間内でどれだけ内容を深められるかは、先生側の工夫のしどころだと思います。時間のあまりかからないような題材であっても、子どもの学びはその心の発達度合いによって大きく異なります。奥村先生がおっしゃる小学生と中学生の絵の違いのように、子どもが成長すれば学びも変わる。小学校で絵を描いて、中学校でも絵を描きますが、子どもの中で働く資質や能力は違ってくるわけですね。

奥村―図工・美術は描き方やつくり方を教えるテクニカルな教科ではなく、見方や考え方を教える思考的、論理的な教科です。作品ありきでテクニックを教えこんでも、生き方に応用可能な技能は身に付きません。どうすれば自分のうちにあ

るものを表現できるのかを考え、試行錯誤し、考えることで、創造的な技能が身に付いていくのだと思います。

「メタ認知能力」を鍛える

村上―以前、中学1年生で紙コップをスケッチするという授業を見ました。15分程度でスケッチしたものについて、班でお互いの作品についてどこが良くてどこが良くないのかを発表し合い、その情報をみんなで共有した上で、再度各自でスケッチするんですね。そうすると、見違えるようにコップらしく描けるようになる。写実的に描くことだけが絵ではないけれど、描きたいものを描きたい形に描ける力も表現する上ではある程度必要です。中学生の知的な理解が高まる時期にこのようなことをすれば、1時間で絵が変わるんですね。これは、描く技術を教えたのではなく、ものの見方やとらえ方に気付かせたのです。そうすると、別のものを描くときにも応用できるようになっていくんです。

奥村―展覧会などを見に行くと、生徒作品が以前と比べて変わっているので驚きますね。一つひとつの作品にちゃんと思いが宿っている。そこから中学生がとても良い状態で美術の授業に取り組んでいるのがわかります。学習指導要領を先生方がしっかりと読み解いてくれているんだと嬉しくなります。

村上―作品のタイトルも変わってきましたね。校舎を描いた絵でも、以前は単なる「校舎」という題名が多かったですが、最近は「○○の校舎」のように、何が描きたかったのかという主題がはっきりしている題名の作品が増えました。

長尾―それも、学習指導要領が整理されて、「生徒に身に付けさせるべき資質・能力」がとらえやすくなり、それに則った教科書がつくられたからなのでしょうね。

小泉―昔の美術科の先生は、それこそ個人芸と言いますか、教科書や学習指導要領など使ったことも読んだこともないとおっしゃる方もいらっしゃいました。

村上―「手引き書」などにあるテクニックを用いれば、確かに見栄えのする絵は描けるでしょう。でも描いた子どもたちは、主題や構想を練る力を身に付けることが果たしてできるでしょうか。もちろん、うまく描けたという満足感は得られるでしょう。しかし、創造する喜びやつくり出す、生み出す喜びは得られないでしょう。

老いたフェンス　中学1年生
アクリル　紙　径25.8cm

▲作者の言葉
切れたフェンスから時間の流れを感じました

奥村―自分の思いを表現した作品は、「自分そのもの」なんです。それを作品＝自分を見つめ直し、修正や工夫を加えていく。つまり、一歩引いて、外から自分を見ている目があるということです。これは「メタ認知」ですよね。子どもたちはあまり意識せずにそれを行いながら作品をつくっていますが、もう一人の自分が自分について考えるというクリエイティブな学びは、他教科ではなかなか得られないものだと思います。

村上―他の教科では、国語の作文もそれに当たるでしょうね。

奥村―そうですね。数学のように全員同

＊1 授業時数の変化

区分		第1学年	第2学年	第3学年
必修教科の授業時数	国語	175	175	175
	社会	140	140	175
	数学	140	140	140
	理科	140	140	140
	音楽	70	70	35
	美術	70	70	35
	保健体育	125	125	125
	技術・家庭	105	105	105
道徳の授業時数		35	35	35
特別活動の授業時数		50	50	50
選択教科にあてる授業時数		140	140	140
総授業時数		1,190	1,190	1,155

「昭和44年 中学校学習指導要領」
学校選択で、各学年週2時間の美術の授業。

別表第二（第七十三条関係）

区分		第1学年	第2学年	第3学年
各教科の授業時数	国語	140	140	105
	社会	105	105	140
	数学	140	105	140
	理科	105	140	140
	音楽	45	35	35
	美術	45	35	35
	保健体育	105	105	105
	技術・家庭	70	70	35
	外国語	140	140	140
道徳の授業時数		35	35	35
総合的な学習の時間の授業時数		50	70	70
特別活動の授業時数		35	35	35
総授業時数		1,015	1,015	1,015

「平成20年 中学校学習指導要領」
選択教科が実質なくなり、各学年週1時間に。

じ正解にいっているかどうかを見つめ直すのではなく、一人ひとりに正解があって、それを見つめ直すというところがポイントでしょうか。今、冷静に自己を見つめるメタ認知能力は、育てていきたい力として注目されていますよね。図工・美術は、メタ認知能力を鍛えるのに最適な教科だと言えると思います。

生徒に必要なのは「必要感」

小泉―今日は長尾先生に、生徒作品をいくつかお持ちいただきました。

長尾―これは中学1年生の作品です。やわらかい針金と新聞紙を用いて、動物をつくるという授業ですね。「ひばり（ひばりが丘中）の秘密の動物」と題し、「自分にしか見えない動物」をつくってもらいました。

小泉―どのようなねらいで取り組まれたのでしょう？

長尾―二つのねらいを持って取り組みました。一つは「形をじっくり見て構造や動きをとらえる」、もう一つは「作品と対話し、想像しながら自分の思いをのせていく」です。

奥村―授業時間はどのぐらいですか？

長尾―12時間ぐらいかけていますね。本当はもう少し短い時間でと思っていたのですが、生徒たちがもっと工夫したいといろいろやり始めてしまって（笑）。

奥村―中学生は、小学生には見られない工夫をするようになります。ほら、この前脚の間などはしっかりと筋肉を感じさせます。

長尾―ありがとうございます。生徒たちには「筋肉や骨、関節などを意識してつくりなさい」ということは伝えました。

村上―理科や数学、保健体育などで得た知識を、美術の中でしっかりと形にしている。中学生ならではの作品と言えるのではないでしょうか。

小泉―12時間という時間を持てあましてしまう生徒はいませんでしたか？

長尾―この題材については、そうした生徒はいませんでしたね。ねらいや題材・テーマと、生徒たちの生きている環境やそのときの興味の方向がぴたりと合致すると、生徒は作品づくりに没頭してくれます。もちろん、それがうまく合致せず、グダグダになってしまう場合もあるのですが。

村上―どの教科もそうでしょうけれど、生徒の実態を把握することの大切さは美術科でも同じです。外見は冷めたように見える中学生でも、題材によっては夢中になって作品をつくる。生徒たちは、作品をつくることに「必要感」がないとおもしろくないんですよ。まさに奥村先生がおっしゃった「ただ『つくる』だけでは終わらない」ということですね。この作品群を見ていて感じるのは、生徒一人ひとりが自分のテーマをしっかり携えてつくっているということ。「どうしてこれをつくらなきゃいけないんだ」という反発が見えないですよね。自分のつくりたいものを自分で決めて、豊かな発想で作品を生み出している。

長尾―先生にやらされている感ではなく、作品を自分に引き寄せて、「自分事にする」ことが美術の学びにとって大切だと思います。

村上―今の学習指導要領では、小学校図画工作は「～表したいことを見付けて表すこと」、中学校美術は「～主題を生み出すこと」、高校芸術の美術は「～主題を生成すること」という言葉が指導事項に入っています。どの学校段階においても、表したい主題を子どもが自分で考えて生み出し、自分で決めることがこの教科の根幹になっているんですね。

作品を通じて見えた生徒の心

村上―たとえば、「自分の手をつくる」といった題材ですと、教師側が「対象物をしっかり見て、イメージを大切にしてつくろう」というようなねらいを持っていたとしても、生徒たちはどうして自分の手をつくるのか理解できず、作品に自分の思いをこめることが難しくなってしまいます。単に本物のようにつくることを目指す授業になってしまう恐れがある。そうなってしまうと、中学生にとっては必要感がなく、つまらなく感じてしまうんですね。

小泉―テクニックが重視されて、リアルな手をつくった子どもが高評価を受けると、美術なんてつまらないと思っている生徒はますますつまらなく思ってしまうでしょうね。

村上―主題があいまいだと評価もしづらいわけです。子どもたち一人ひとりの主題がどのように表現されているか、そこを重視して評価しなければ、教師の好みで評価が変わってしまう恐れがあります。

奥村―ところで、こちらの犬に生えているのは羽ですか？　この作品にはどんなストーリーがあるのでしょう。

長尾―これは、この作者である生徒が飼っていた犬なんですね。生徒が生まれたときから飼い始めた犬だったそうで、

13年間ずっと一緒に生きてきた。

奥村―そうか、死んでしまったんですね。

長尾―その生徒がすごく暗い時期があって心配していたんですが、この作品をつくっているときに、実は兄弟のように育ってきた犬が死んでしまったんだと話してくれたんです。天国から自分を見守ってくれているということを表現するために、犬に羽を生やした……と。この作品をつくることがなければ、私は生徒とこのような話をすることはなかったでしょう。生徒のそうした意識の深いところにある気持ちを、作品発表会をとおしてクラス全体で共有できるということも、美術ならではのすごさなんじゃないかと思いますね。

奥村―子どもたちは日々さまざまな経験を重ね、成長している。長尾先生の選んだ題材が、羽の生えた犬をつくった生徒の成長過程にぴたりと合致していたからこそ、生徒は素直に心のうちを表現できたんでしょうね。

中3だからできる学びがある

小泉―日々、生徒たちの作品を見ていて感じるのは、作品は生徒たちの心の成長を映す鏡なんだなぁということですね。たとえば、毎年自画像を描かせていたとしても、中学3年生になると描写がガラリと変わる。

長尾―1年生は、自分の中にあるものを表現しようとしているように思います。そして2年生になると、自分と周囲とのかかわりを描こうとする。さらに3年生になると、自分と社会とのかかわりを考えて描いているなと感じます。

奥村―学年によって、子どもたちの発達はぜんぜん違います。子どもの成長を「ざっ」と見ないでほしいですね。学習指導要領も小学校は「低学年」「中学年」「高学年」ではないんです。「1・2学年」「3・4学年」「5・6学年」ですし、中学校は「1学年」「2・3学年」、高校は「1学年」「2学年」「3学年」と細かく分けているんです。

村上―中学3年生にもなると、テクニックはもちろん上達しているでしょうけれど、それ以上に見る視点や考える視点が深まります。そして、物事の表面だけでなく内面的なものも大切にするような心の成長も見られます。高校受験を控えてさまざまな葛藤があり、自分の将来や生き方などにも関心を深める時期です。このような中学3年生だからこそつくれるものがある、描ける自画像があるんですよ。中学3年生にならないと身に付きにくい力や、理解しにくい価値観などがあるんですね。それは大人になっていく上で大事なものなんですね。だから、中学3年生まで必修教科として美術を学ぶ必要があるんです。

小泉―生徒たちの心の成長に合わせたカリキュラムを教師がつくっていく上で、中学校美術の教科書が「1年」「2・3上」「2・3下」のように3冊に分かれていることは、とても意味のあることだなと感じています。

心の中の自画像　中学3年生
アクリル　ペン　紙　42×29.8cm

村上―「2・3上」はおよそ2年生、「2・3下」はおよそ3年生の発達段階を考えた題材構成がなされていると、特に若い先生方や免許外の先生方が増えてきている中で、2年生と3年生との学びの違いや、3年生ならではの学びが多くの学校で保障されるということですね。

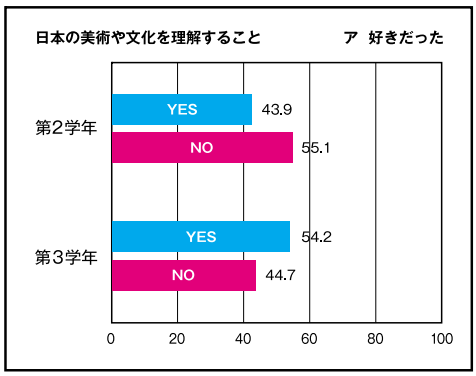
奥村―やはり教科書は「頼りになる存在」であるべきだと思いますね。新版の図画工作の教科書*2を拝見しましたが、「学習指導要領を具現化している！」と思いました。学習指導要領の発表からすでに6年が経過し、ある程度「こなれた」ところで出るという、そのタイミングが良いんでしょうね。良い仕上がりの教科書になっています。

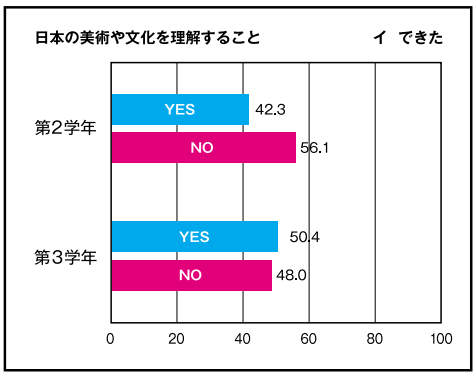
鑑賞教育で価値意識を高める

長尾―中学3年生ならではの学びがあるということを意識すると、授業者として実践していく責任を強く感じます。

村上―中学3年生の学びということでは、美術文化の理解などが重要です。国立教育政策研究所の中学生への質問紙調査*3では、「日本の美術や文化を理解する

*3 日本の美術や文化について





「音楽等質問紙調査」国立教育政策研究所・平成16年度

*2「平成27年度版 図画工作教科書 1・2上」日本文教出版刊

ことが好きだった」「日本の美術や文化を理解することができた」という質問に対して、肯定的に答えている生徒の割合は、中学2年生では半数以下なのに対し、中学3年生では半数を超えています。美術文化は、一つの作品を見ただけではわからない。ある国のある時代の複数の作品を見て、そこから共通の美意識や創造的な精神を感じ取って、初めて文化というものがわかる。これは中学3年生くらいにならないと、十分理解できない内容だと思います。

奥村―中学3年生という自己が確立する大事な時期に、「美術」に触れるというのはとても大事なことですね。美術鑑賞は、「これが〝美術〟なんだ」「これが〝美しい〟とされているものなんだ」ということを理解するためだけでなく、「果たしてこれは美しいのか」「美術とは何か」など自分の中の価値意識を高めるという役割を持っています。日本の作品と海外の作品を見比べることで、日本と海外の文化の違いも感じられるでしょう。

小泉―鑑賞の題材については、どのような基準で選定していくべきと思われますか？

奥村―それについては「鑑賞教育・jp（http://kanshokyoiku.jp/）」というウェブサイトをご覧いただきたいと思います。「この学年にはどんな作品を鑑賞させると良いのか」「この作品はどこにポイントをおいて鑑賞すると良いのか」といった先生方の疑問や悩みを解きほぐしていこうと考案したものです。

長尾―「鑑賞教育キーワードmap」とは、どんなものですか？

奥村―まず学年を選んで、さらにキーワードを選択すると、それに適した作品が抽出されるという仕組みです。

長尾―簡単で、直感的ですね。

奥村―「鑑賞教育・jp」では、東京国立近代美術館（本館・工芸館）、国立西洋美術館、東京国立博物館の所蔵作品を検索することができます。作品解説も掲載していますし、マウスオーバーで拡大表示させることも可能です。また、たとえば岸田劉生の『道路と土手と塀（切通之写生）』と東山魁夷の『道』、和田三造の『南風』と萬鉄五郎『裸体美人』のように、比較鑑賞の実践例が紹介されている作品もあるので、参考にしていただければと思います。

小泉―学年やキーワードにも一つひとつ解説が付いているんですね。「中2・3」という項目には「中学2・3年は、形の微妙な位置関係や色の性質など複雑な要素を分析の根拠としながら鑑賞するようになります」と出ました。そして「内省」は「自己と向き合う……」。なるほど、これは鑑賞の授業を組み立てる際に活用できそうです。

村上―美術の授業では表現に重きを置きがちですが、鑑賞も重要です。日本の美術文化に触れ、理解を深めていくことで、日本人としての礎をつくっていくことにもなります。

奥村―まさに「国民力」を育成していると言えるのではないでしょうか。

村上―「美術は、中学3年生では選択科目でもよい」といった声も聞きますが、きっとその人たちが受けた美術の授業は、絵の描き方やもののつくり方などのテクニックを学ぶ時間でしかなかったのかもしれませんね。

長尾―自分の経験から美術という教科を否定しているということですね。それは寂しい……。

村上―今、美術を学んでいる生徒には、そのような気持ちにはなってほしくないですね。中学3年生の題材と、1年生や2年生の題材との違いが技術の差くらいにしか感じられないと、将来大人になった時に中学3年生まで美術を学ぶ必要感が得られにくいのではないでしょうか。やはり、3年生ならではの学びが見える授業を示さないと。

奥村―その点、長尾先生にお持ちいただいた生徒作品は、作品タイトルに加えて作者によるコメントも付記されていて良いですね。どんな思いをこめてつくったのか、それがちゃんと表現されているかは評価の基にもなります。

小泉―最近は展覧会でも、コメントの付いている作品が多いですよね。

長尾―生徒たちもあとから振り返ったときに、この作品をつくっていたときはこんな気持ちだったんだと思い返すことができるようです。「なんて恥ずかしいことを書いていたんだ」と顔を赤くしながら、大切そうに作品を持ち帰る子もいますね。

奥村―過去の自分を冷静に見つめる目を

持っている。それこそしっかり成長している証しですよね。成長したからこそ、過去の自分が恥ずかしく、そしていとおしいんです。「作品」という「過去の自分」と向き合えるって、すごい教科だと思いませんか？

自己と向き合える強さ

小泉―学習指導要領の発表から6年が経ち、ある意味「こなれてきた」というお話がありましたが、こなれてきた今だからこそ見えてきた、図工や美術の授業での課題はありますか？

奥村―教科書（新版図画工作）どおりに進めていけば何の問題もないのではないかと（笑）。

長尾―課題としては「教科書がすばらしいのに授業で活かしきれていないね」と言われないようにしなくては、ということでしょうか。

村上―きっとすばらしい授業がたくさん生まれてくることでしょう。そのような、新たな優れた実践を、うまくシェアできる仕組みがあると良いですね。

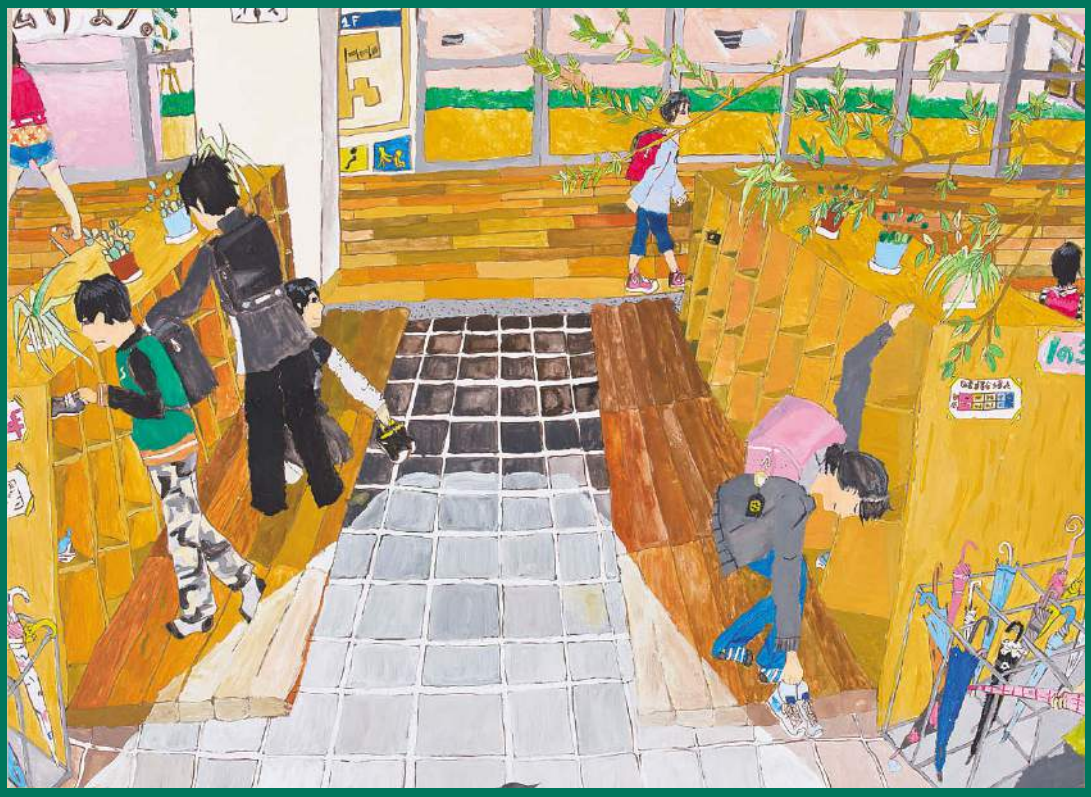
長尾―それはぜひ！　もちろん、実際に足を運んで研究授業を拝見したり、積極的に研究会に参加するのが一番だとは思います。中学校では、都中美（東京都中学校美術教育研究会）などで多くの

A 表現

小中高系統例（風景画）

「小学校 図画工作5・6下」

題材 「わたしの大切な風景」



始まる一日

絵の具　ペン　紙

題材の目標 …… 毎日の生活を見つめることで見つけた、大切に思う風景を絵に表す。

材料・用具 …… 教師…画用紙　色画用紙　アイデアスケッチ用紙　パステル　コンテなど
児童…水彩用具一式　サインペン　クレヨン・パスなど

場の設定 …… 広い作業机を用意したり、教室の机を合わせたりするなどの工夫ができるとよい。

評価規準の例 ……
- 関 毎日の生活の中から、大切に思う風景を見付け、絵に表すことに取り組もうとしている。
- 想 毎日の生活を見つめながら、大切に思う風景やその様子を考えている。
- 技 大切な風景の様子や思いなどが表れるように、表し方を工夫している。
- 鑑 自分や友人の絵を見て、大切にしたい思いや作品のよさを感じ取っている。

すばらしい実践を見て学ばせていただきました。でも現状として、激務という言葉が決して大げさではない忙しさの中で「そうした時間がとれない」という先生も多いと思います。それこそ、先ほど奥村先生にご紹介いただいた「鑑賞教育・jp」のように、網羅的に検索できたら良いなと思います。

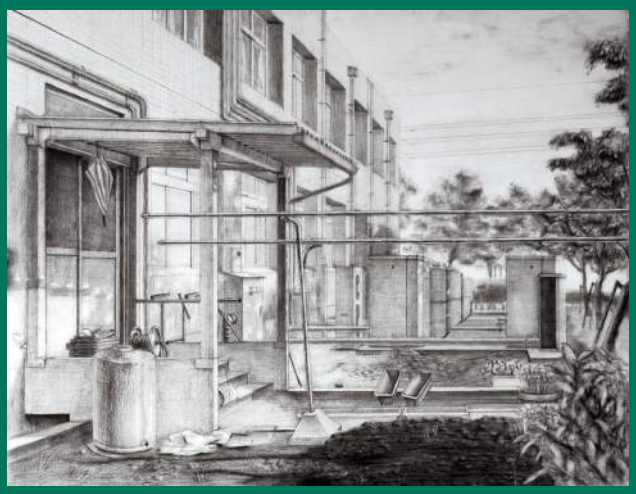
奥村―これは課題ではなく期待なのですが、新版の教科書をベースに、思いをこめた強い作品がたくさん生まれることを願っています。よく「図工や美術が得意な子は繊細だ」なんて言われますが、それは大間違いです。図工や美術の授業というのは、ひたすら自分と向き合い続ける「厳しい」時間です。大人だって子どもだって、自分と向き合える人間というのはとても強い人間ですよね。私たちは強く生きる子を育てているんです。そして、自分と向き合い、自己を考えるということは、他者を考えるということとイコールです。子どもたちは、自分で自分をつくっていくという過程において、自分を大事にし、同様に他者を大事にしようとする心をはぐくんでいくのです。

小泉―そういう意味では、図工や美術は「生きる力」の育成に直結している教科と言えますね。

村上―そうですね。先生方には、そのような図工や美術の良さをしっかり意識して子どもたちの指導に当たっていただきたいと思います。

「高等学校 美術Ⅰ」

題材 「生活している場を描く」



鉛筆　水彩　紙

題材の目標 …… 普段生活している見慣れた教室や校庭などにも美しさがあることに気づき、心を動かされた場所の雰囲気までとらえて表す。

評価規準の例 ……
- 関 何気ない風景などから、美しさやおもしろさを発見し、それを愛着を持って絵に表そうとしている。
- 想 描く場所の魅力を十分表現するための構図について、スケッチなどを重ねて吟味している。
- 技 遠近法により正しく空間を描き、明暗を適切にとらえ、ものの質感表現などを工夫している。
- 鑑 作家作品や友人の作品を鑑賞し、場所を選んだ理由やそのよさを表現する工夫など、作者の意図を理解している。

「中学校 美術Ⅰ」

題材 「なぜか気になる情景」

渡り廊下

アクリル　紙

題材の目標 …… 毎日の生活の中で、見慣れている場所やものを新たな視点で見つめ直し、その特徴を絵に表す。

評価規準の例 ……
- 関 生活の中で気になる場所やものなどを見つけ、その特徴をとらえて表すことに取り組もうとしている。
- 想 気になる場所やものなどから、表したい主題を明確にし、構想を練っている。
- 技 場所やものなどの範囲や画面の構成、奥行き感や色彩などを工夫している。
- 鑑 気になった場所を、どのように工夫して表しているかを感じ取ろうとしている。

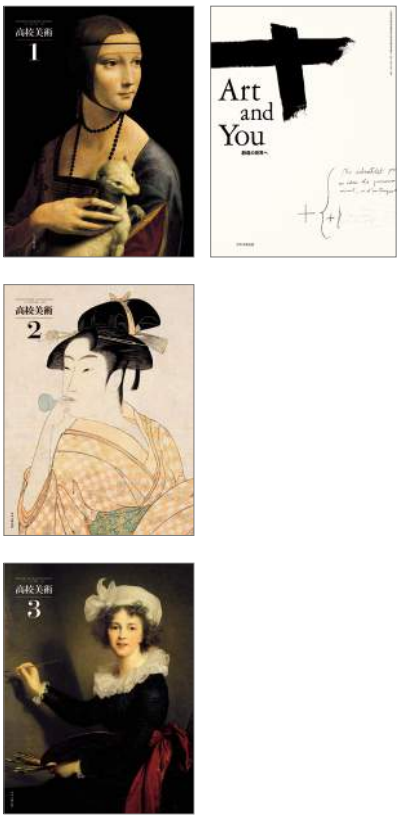
小・中・高をとおして「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。

小学校図画工作から中学校美術、そして高等学校美術・工芸まで、半世紀以上にわたり日文は、子どもたちの成長に寄り添った教科書づくりを目指してきました。

小学校図画工作教科書

中学校美術教科書

高等学校美術教科書



高等学校工芸教科書

15歳の美術 12年の学びをとおして

日文教育資料［図画工作・美術］
平成27年（2015年）3月18日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

アートディレクション：おおうちおさむ　デザイン：小幡彩貴 児玉英里子
CD33263

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690